

秋水  
泡語

卷  
の  
四

二  
〇  
〇  
〇  
年

「林達夫が生涯をかけて見事にわれわれに示してきたのは、勇氣とは、わが道を行く決意のかたさだということ、主観的気分を抑え、世界の現実を直視し、いかなる事実もそれを事実として認めてゆずらぬということ、断じて流行に従わず、漠然として扇情的な言葉を切り捨て、散文を厳密にただ思考の手つづきの表現とみなして憚らぬことだ、ということである。」

「美学とは、構造の確かさであり、手段と目的との必要にして十分な適合であり、かの桂離宮の如く（東照宮ではなく）、かのシトー修道院の如く（ロココではなく）、精神の潔癖さの形と化したものだ、ということである。」

「生活と精神とを媒介する形式としての『風流』」

「研究室の外に出た科学者は、一人の人間として一つの人生を生きていく以上、そこにどうしても詩人としての面をもたなければいけないということです。それから、社会に一人の市民として生きている以上、どうしても社会に対して、ある種の信条をもたなければならない。」

『加藤周一コレクション』から

「個別的な特殊な経験を社会化する」ことがわたしにできるか。

一月五日

祈りだけ残す冬の夜しんと

一月十二日

冬空にシナプス広げひとり立つメタセコイアの在りよう学ぶ

一月十五日

鉛筆の音だけがする小正月

一月十七日

「雑感」

「雨の降る品川駅」を書いた詩人は

喜びをもつてその詩を書いたのではない

人間という不出来のものへの痛恨をこめて書いたのだ

人間存在へ限度を越えた抑圧をなす者は

人間に対して敵として立ち現れる

その敵へ反撃することは正義である

抑圧の制度の要をなす者、加担する者は

たとえその自覚が薄いとしても

人間の尊厳に対する敵である

元独裁者は人権侵害者として告発され

一月二十日

隣国の元大統領は戒厳令下の所業を罰せられた  
虚栄によつて肥太りその実ちつぽけな俗物にすぎぬ者  
その者を正義の名において撃て  
人間を抑圧から解放するために

熱秘めて柿爛熟す寒の雪

背を向けて菜の花が立つ寒の風

降る雪に一声鳴いて立つ小鳥

一月二十八日

雪を着て立つ木々達を訪ね行く

二月一日

物皆と寒の陽射しの中に立つ

木々の芽は固いつぼみとなつてある自己に未知なる展開期して

二月四日  
春立つ日畑をおこす人は野へ

二月五日  
春節の朝日を祝う霜の原

二月九日  
まだ凍る三日月が見る冬の世を

二月十日  
早春の路上に小鳥たわむれる

二月十三日  
往還にたぬきが不慮の往生す

二月二十五日  
ちゃんちゃこを着て犬が行く梅の下

窓に来て鳥はアリア四度ほど歌う二月の春の喜び

二月二十七日  
そのように気力の萎える晩年が人には来ると予期しつつ立つ

夢<sup>じんせい</sup>という世界と自己を見つめつつ時間の中に在る物語

三月十九日

ぬかるみに竜のひげ買う春の市

手も足も出ぬ石人として春の藪（石人山古墳）

石人が別区にあつて観る天地

時が続べる前方後円森の春

規矩棄てた世に球描き馬酔木咲く

三月二十日

沈丁の香りと月を糧として危うき生を試みる者

三月二十三日

悪戦を卒業もせず愚禿の身

糠雨に咲く花々の一つとなる

悠然と自他を見つめる春の山

三月二十六日

桜咲く宣言に早名乗り出て午後の陽射しに風切る燕

四月六日

ヒトという未熟の者も花の下

春宵を惜しむ万物有無の間

四月七日

蝶一人蓮華の下を遊行する

大空へ昇る散華を仰ぎ見る

「ただ叫びの強烈な人、かの誠実に充ちた人だけが生命を  
喜ばず芸術を遺したのである」……中原中也

四月九日

地を出でたエビネは虚空探り当て

四月十日

同人になった春とよ内祝い

句の会の序列の外に無位の春

その春と野の果てに住み泡語詠む

四月十三日

桜散る川瀬の波のさんざめ生きものの皮膚超えてくる波

愚昧にして春のうたた寝うつろなる  
(あまり刺激のない話を聞かされて)

わらび一つ採って見上げる芽吹く木々

花見客去って黒猫山の茶屋

四月十四日

山中に法を聞き見ること難し

(山中でも)

春うらら うらら 法話と共に寝る

(仏法とは、世界はかくあると悟ること)



旅から帰れば要介護三の人

五月四日

眼に山を容れて若葉と溶けて在る

五月五日

揺りいすで対岸を見る無事の春

五月十一日

身の内と外に微妙な形象を編み上げていく生きものとして

五月十四日

母の日の定めにあらず母叱る

五月十七日

雀子二羽南山五月小雨中

五月二十一日

万緑に変わる夕陽の無量光

逆光の山 幽玄に暮れる初夏

卯の花が散る丘下る長い影

五月二十二日

ねぎ坊主集め種とる夏迎え

五月二十三日

淵明・モンテーニュの末裔は園遊会を好まない。

小庭のさつきと遊ぶ大悟待ち

亀虫の後に吸いつく桜桃

わたくしに世界が聴き入るしじま見る

五月二十五日

詩人は、「僕は美の、核心を知つてゐるとおもふのですが」と詠っている。

本当に美の核心を知ることとはひたすら自己を確信すること？

五月二十八日

刈り込みの高切り鋏み樂しまず不合理な世に心乱され

「個別的な特殊な経験を社会化する、これが詩人の仕事になるでしょう」

…加藤周一

五月二十九日

切り取られアジサイは色になお生きる

老棟梁セカンドギアで沈む日をゆるやかに追う五月の風と

老境を耕す人やキャベツ畑

五月三十一日

緑から遠く人事の中に在る

「鬼の歌仙は短くて」

卒中の後に回生した人を

見れば地獄のアルツハイマー

地獄とは望みも絶たれ行く末に

渚の砂に印す労役

甘受して地獄の地獄行く地獄

回生した鶴見和子のなんという強さ

六月一日

「夜間目覚めて一首を得る」

山は盛んにして青を出だし了わり

人は老いて未だ境を窮めず

覚らず、林間に迷う

何ぞ値せん一回の生に

「言語に関する考察と、一步毎にする言語の再発明とのないかぎり、詩はありえない」、「詩句にあつては、単語の間に毀ち難いむすびつきをつくりだすことが問題である」とルイ・アラゴンという人が言っている。

六月三日

あらそつて溺死に向かう群れのごと動く社会にわが生を為す

六月七日

田植え機の行く田に水と風歌う

六月十二日

「そして七尾のメダカは死んだ」

美の娛しみを、

三十年來の空池にモネの睡蓮を！

そして七尾のメダカは死んだ。

南方の珍しい魚たち、

並んで彼らもガラスの水槽に、

そして七尾のメダカは死んだ。

親類に食われる定めを、

代わりに昆虫の幼虫を食う役目に変えられ、

そして七尾のメダカは死んだ。

虫けらを食う代わりに、

塩素を飲んで、

そして七尾のメダカは死んだ。

脊椎を持つ末裔にすぎぬやから、

少しばかり頭の大きい者の娛しみのために、

七尾のメダカは死んだ。

さわやかな皐月の月と酒後の道

六月十四日

梅雨寒や萩咲き急ぐわが庭に

耕せば大小の鳥 田植え前

梅雨晴れの瑞穂の国の御田は今水を湛えて天地を映す

六月十六日

幻想の大楠さわわ揺れる闇

螢火がゆらら川辺の夢幻能

六月二十二日

一仕事やったつもりで行く雲を見れば遊子の自由なること

六月二十三日

真剣に童は語る梅雨晴れ間

銘銘に時の記念日どの時も

その時は風の織り成す砂の紋

六月三十日

長身のメタセコイアが全身を風に揺らせて六月が行く

七月一日

七月になった良夜の空高く轟音引いて飛翔するもの

七月三日

風殊に女庭師の木蔭まで

七月四日

それぞれの顔持つて立つ夏の雲

胸たたく男もやがて相貌をくずし消え行く夏の天空

七月六日

神仏を説く俗物に我が自由侵されている悪戦の中

七月七日

太陽暦七月七日小良夜清涼風雅処々人語

七月十二日

綿入れを着る人の在り蟬が泣く

冬扇であおげ綿入れ着た人を

七月十四日

蟪蛄の子は葉の上で手を合わす

合わす手が殺生もするこの世界生きる願いは定めでもある

窓に蟬鳴かず動かず更ける夜

七月十七日

人間の行為は実に身体に設計された機序に従う

七月二十六日

人生を引受けること難くして引受けるほか人にすべなし

七月二十七日

ファカルティデイヴェロッパせよと五十五の男に迫る者の顔見る

雲湧くよ自己の卑小を悟りつつ

蜻蛉と人の卑小に眼を開け



七月三十一日

迷走する組織間近に見聞きする歴史のダイス意味を求めず

八月六日

鬼二人黙し蟬さえ声上げず

夕立に右往左往の皮袋

人あつて驟雨に感受乱されず

八月七日

大いなる眼の台風に睨まれる

八月十七日

異境にも夏の野の花続く道

九月一日

諦観し南で北で歌う虫

蟋蟀の語り尽くせぬ口説き節

九月六日

騒風に洗われる日を待つ身かな

穏やかな合唱の声秋風に聞き分けるほど心を澄ませ

九月十日

法師蟬この世の果てから呼びかける

九月十二日

人、雀、百家争鳴、野分前

野分来て漢宮秋月怨み濃く

雲上の名月愛でむ漕ぎ出だせ

九月十六日

白潟に山の端赤み大き月

白萩に星が瞬く風ぐ入り江

九月二十四日

「佐渡紀行」

行きはぐれ北の両津をさまよえば彼岸の雨に村雨の松

海が挟む此岸の秋や墓に花

山門の内に夏草焼く坊守

うたた寝をして秋風に聞くおけさ

旅人が待ち合わす時萩が散る

山萩やきりぎりすと行く佐渡路かな

(バスのフロントガラスに)

島守は順徳帝ぞ咲く尾花

荒海や安寿を嘆く曼珠沙華

厨子王の母は天空横たわる大荒海を見極め尽くす

能面は運命という旅を行く世阿弥の夢は見果てずにあり

十月一日

オリンピック終える祝宴千年紀人の実相照射する夜

十月四日

土手の草刈って小川の水は澄む

十月十日

天仰ぎ持ち堪えかねる十三夜

昨日幾度も／ 今日幾度も／ 明日幾度も／ 母は繰り返す  
昨日何度も／ 今日何度も／ 明日何度も／ わたしはどなる  
これが人の営み／ かくも無意味で／ 優美を欠いて  
無縁の夜空は／ 無関心に／ 晴れ渡る  
明後日、望月はそれでも上る

十月十二日

刈り入れて肩揉んで見る雨模様

望月を眼に焼きつけて秋の床

十月十三日

青北風や緑にすぎる紋黄蝶

雁渡し百舌も高鳴く野末かな

十月十四日

野良猫も肥えてのそのそ歩く秋

十月十七日

秋雨を避ける雀の軒の今

十一月五日

瀧の音共々聞いた人はなし秋の峠はまだ紅葉せず

十一月六日

コスモスも刈られる時や生と死と

十一月八日

弱き胃に沁む秋の水運ぶ身よ

十一月九日

行く秋や少年に抜かれ暮れる坂

十一月十一日

耳の奥過ぎて行く時しんと

もの皆が行く秋の夜に耳すます

「日録風の作品を並べて行つて、それゆえに生のリアリティが創造される  
と考えるほど楽天的なことはあるまい」と歌人が言っている。

十一月十五日

泥舟の会議の笑い切り刻む事象はやがてかなしく滅ぶ

わたくしのいのちいちにちしようじんする

まなこをとじていきふかくすう

もしすこしちからをえればひとのよに

ひとつふたつのことばおこなう

ねがわくばしぐれのなかにみをあらう

きぎのあいだのもみじたるべし

十一月十六日

歌いつつ時の踊りに散る落ち葉

十一月十七日

僥倖に会おう時雨の並木道

十一月二十四日

秋去れば都市の暮らして溷れた眼に仰ぐ夜空の星のまばゆさ

不可思議に夜露したたる音がする  
自然の理法、受けがたき生

十一月三十日

仰臥して点滴受ける人の顔、息止む時の姿思わす

十二月三日

鏡中の己分からぬ人の冬

十二月四日

並木道今は枯れ木となった午後ひともわたしも為すこと知らず

十二月七日

大雪に鬼蜘蛛高く糸を張る

張る糸にのぞみをかけて春を待つ

十二月八日

淵明が見た世と同じ世を生きる心を洗う詩を渴望し

南山に嘯いて見る冬の夜

十二月九日

ほおえみを生んで 膚はだへに射す冬陽

十二月十一日

凍て風に散らずうごめく者として

十二月十二日

玄冬に染まる夕闇武者一騎

折れた矢を肩に負う影凜として

十二月十三日

老庭師松の枝剪り世紀遣る

十二月十八日

ペダルこぐ今この時が繰り返し許さぬ生のいとなみとして

十二月二十一日

無季の薔薇呆けて冬至送る人

耀いて冬至を越えて立つ銀杏

回生を願ひ柚子湯で目を閉じる



十二月二十二日 陽が上る奇跡に対すいのちあり

もの枯らす風の夜臥して思案する

十二月三十一日 大つごもり甕に松入れ海を見る

二〇〇一年 正月  
徐山亭 謹製



「一夜分の歴史」 (二節)

中原 中也

.....

と、そのような一夜が在ったといふこと、  
明らかにそれは私の境涯の或る一頁であり、  
それを記憶するものはただこの私だけであり、  
その私も、やがては死んでゆくといふこと、  
それは分り切ったことながら、また驚くべきことであり、  
而も驚いたって何の足しにもならぬといふこと、

.....  
.....